

土田 健次郎（早稲田大学名誉教授）

「儒教の思想史研究と思想分析—朱子学を中心に—」

中国思想研究は主に二つの領域を中心に行われてきた。一つは思想の歴史的推移を追求する思想史研究であり、もう一つは個々の思想構造の分析である。私の道学（宋学）研究もこの二領域にわたっている。前者は、北宋に道学という学派が形成され、その展開の中で南宋の朱子学が登場するまでを主題にしたもので、これは『道学の形成』（創文社、2002）にまとめた。後者は、道学の集大成者とされた朱子（朱熹）個人の思想的結晶の構造を究明したもので、近著の『朱熹の思想体系』（汲古書院、2019）がこれに相当する。私がこの二領域のいずれにおいても試みたのは、後世の様式化された思想史的整理をいったんはずし、あたうる限り思想が発信された現場（以前それを「思想の現場」と表現した）に立ち返ることであった。朱子のものを朱子にかえすと称する研究は従来から少なからずあったが、いわゆる漢学史、宋明理学史的な刷り込みからどれほど脱却していたであろうか。道学以外も視野に入れ、当時の士大夫の思想的営為全般を見通しつつ、その中で個々の思想家や学派の個性と思想的内実を把握していく試みは、果たして十分であっただろうか。ただ現段階にあっても、この方針による朱子学研究の遂行によって、先行研究とは異なった朱子の像が浮かんできているように思われる。今回はその内容と残る課題は何かについて述べてみたい。また時間があれば、朱子学と陽明学の知行論を取り上げ、思想を対比することの問題に及びたい。